

わたしたちの宝「灰ヶ峰」

「まもる、おきなさい。今日は、灰ヶ峰公園の自然観察会の日よ。」

母の声にまもるはとびおきた。

アサギマダラが見つかるといいな。」

まもるの目はかがやいていた。

今回の観察会は、アサギマダラのマーキングとチョウの観察だ。

まもるはお父さんといっしょに少し早く灰ヶ峰公園に集合した。灰ヶ峰の朝はひんやりした空気がただよいとてもすがすがしい。鳥の鳴き声もひびきわたっている。

しばらくすると、ひろしま自然の会の方たちや観察会に参加する人たちが集まってきた。

今日は、アサギマダラのマーキングを行います。みんなで手分けしてさがしましょう。」

ひろしま自然の会の方のせつ明が終わると、ニグループに分かれアサギマダラをさがした。

くもっていたせいか、アサギマダラはなかなか見つからない。その時、「アサギマダラがいたぞ。」

日の光を受けたコナラの木の間にアサギマダラがとぶのが見えた。

あみを持って必死に追いかけるがなかなかつかまえることができない。

ひろしま自然の会の方がひくい草の上にとまったアサギマダラにそっと近づいた。





「バサッ」

ふりおろしたあみの中を見ると、そこには黒と白、そして茶色いもようのある美しいはねを持ったアサギマダラがいた。虫かごに入れたアサギマダラをみんな

歓声^{かんせい}を上げながら見ている。すごいね。きれいだね。」

写真をとりながらうれしそうに話をしている。

いよいよアサギマダラのマーキングだ。ひろしま自然の会の方々がチョウを取り出し、マーキングの用意をしてくだされた。

「だれかマーキングをしてみませんか。」

ひろしま自然の会の方のことばを受けて、

「まもる。やってみるか。」

と、おとうさんがぼくにたずねた。

はずかしいなと思ったが、せっかくのチャンスだからと思い、やってみることにした。はねのうらの白い部分に、フェルトペンで、

『クレ01 10/12』と書いた。



マーキングしたアサギマダラ

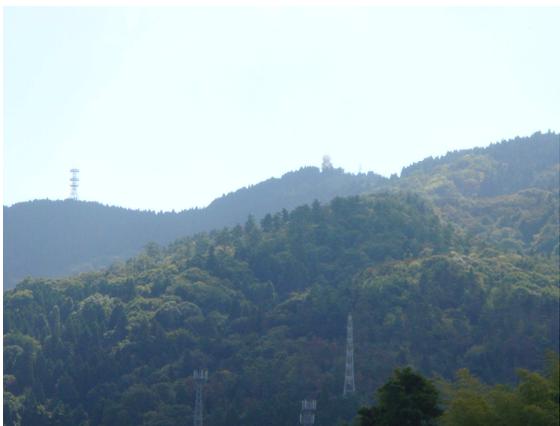
はねに文字を書くのははじめてなので、チョウはだいたいようぶかなとどきどきしながら書いた。

マーキングをすると空に放してやった。アサギマダラは灰ヶ峰のすみきった空にとび立っていった。

みんなずっと笑顔で見送っていた。

「アサギマダラは渡^{わた}りをするチョウなんだ。旅のようなものだね。でも、いつごろどこからどこに渡りをするのか

よくわかっているいなんだよ。だからマーキングをして、
いっどこにいたかをしるしておくんだよ。」
「そうなんですか。でもひろしま自然の会の方はどうして
灰ヶ峰公園の自然観察会をするようになったんですか。」
「それはね、灰ヶ峰はむかしから生き物の宝庫だったんだ
よ。でも、だんだんと人が山に入らなくなり、荒れて生
き物が少なくなってきたんだ。それで、大事な灰ヶ峰の
生き物たちを守り、灰ヶ峰がいつまでも『生き物の宝庫』
であるように観察会を始めたんだよ。山はね、人間が開
発しすぎてもこわれてしまうけど、まったく人間がかか
わらなければ荒れて生き物たちがすめない森になってし
まうんだよ。だからこの会を通じて、灰ヶ峰の生き物に
関心をもってもらいたいんだよ。」
まもるは、最後にひろしま自然の会の 生き物はみんな、
ほかの生き物の命をもらって生きているんだ。わたしたち
人間もいろいろな生き物のおかげで生きているんだよ。」と
いうことばを思い出しながら、美しい灰ヶ峰の山を見つめ
ていた。



灰ヶ峰

